施設紹介

# 国立成育医療センター，ドナルド・マクドナルド・ハウス

熊澤光生*

第7回日本小児麻酔学会が宮坂勝之会長の下，2001年10月12，13日に日本都市センターで行われた．それに先立って10月11日午後，上記2施設の見学バスツアーが，約40名の学会員参加のもとに行われた．最初に建築中の国立成育医療センター内を，次いで竣工しオープンを待つばかりのドナルド・マクドナルド・ハウスを見学した．

国立成育医療センターは，国立小児病院と国立大蔵病院の統廃合によって作られる病院で，来春2002年3月1日開院を目指して，大蔵病院敷地内に建築中であった．工事も最終段階でペンキとセメントの臭いがたちこめる中での見学となった．入院500床，外来900人を目指すそうで，広々とした外来，小児患者に配慮した病室が印象的であった．

国の財政が行き詰まってきた今日，こんなに金を使ってよいのかしらと心配するほど立派なものが出来つつあった．少子高齢社会へと移行している日本，子供は宝として扱わねばならない．そういう考えで使う所には使うという考えなのであろう．

成育医療という言葉，聞きなじみのない方もおられるだろう．これについては頂いたパンフレットの序文を紹介して，その説明に代える．

『少子化が急激に進むなか，次代を担う子どもとその家族の健康は国民的課題となっています．一方，専門分化する医療環境において患者やその家族を中心とした総合的，継続的医療が強く求められています．成育医療は，これらのニーズに応えるため，胎児から小児，思春期を経て出産に至るまでのリプロダクションサイクルを対象とした総合的かつ継続的医療をめざすものです．これまでの診療科の枠を越え，ライフサイクルという新しい概念に基づいた“成育医療”の確立をめざして国立成育医療センターの建設をすすめてまいりましたが，このたび21世紀最初の高度専門医療センター（ナショナルセンター）として平成14年3月に開設の運びとなりました．当センターは，これからの世代の心身の健康をささえるモデルとしての役割をはたしていきます．』

21世紀の小児難病の治療センターとしての役割を果たしていくことが期待される．

ドナルド・マクドナルド・ハウスは，上述の成育医療センターに隣接して建てられた．建物も竣工し内部施設も整えられ，内部専従職員と募集されたボランティアの婦人方で，オープンに向けての準備打ち合わせがなされていた．

ドナルド・マクドナルド・ハウスについて知っている日本人は少ないと思う．実は私もこの見学会の前までは，全く知らなかった．小児病院の側に建てられ，長期入院を余儀なくされる小児患者に，家族と過ごす場所を提供する施設なのだ．世界にはすでに百を数える程あるそうだが，日本では始めてのことで，これが第1号ハウスになったとのことである．建築・運営費用は全て善意の寄付によって賄われ，患者家族の施設利用費も1日千円を予定しているとのことであった．また患者家族の炊事，洗濯などを手伝う人はボランティアだそうで，予定の数倍の応募があり面接選抜を行ったことを聞き，多くの企業からなされた寄付の話とともに，日本も変わりつつあると感銘を受けた．

このような善意による施設の建設と運営は，いつ何をきっかけに始まったのだろうか？また，マクドナルドと云う名の由来は何であろうか？ハンバーガーと関係あるのか？この疑問への解答の代

*山梨医科大学麻酔科学講座

Presented by Medical*Online

わりに，これもマクドナルド・ハウスのホームページ（http://www.dmhcj.or.jp）の一文を紹介する．

『フィラデルフィアでアメリカンフットボール選手として活躍していたフレッド・ヒルの愛娘（3歳）が白血病にかかりフィラデルフィア小児病院に加療のため入院することになりました．娘の入院中フレッド・ヒルがそこで目の当たりにしたものは，狭い病室で子どものかたわらに折り重なるようにして寝ている母親，やむなく病院内の自動販売機で食事を済ませている家族でした．彼もまた入院先の病院が自宅から遠く離れていたため，金銭的にもそして精神的にも苦痛を感じていました．そこで彼は病院の近くに家族が少しでも安らげる宿泊施設ができないものかと考え，さっそく活動を開始しました．病院の近くにあるマクドナルドの店舗オーナー，病院の医師，そしてフットボールチームの仲間の協力を得て募金活動が進められたのです．そして1974年，フィラデルフィア新聞社主が提供してくれた家屋を改造し，世界初の「ドナルド・マクドナルド・ハウス」が誕生したのです．彼らの切実な願いを数多くの人たちが分かち合い，3年後にはシカゴに第2号ハウス，そして第3号のハウスがデンバーに誕生しました．やがてこの活動が世界的に広がりを見せ，今では世界各国で「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の建設が進められています．

病気の子どもが親元を離れて長期入院生活を余儀なくされることは，入院している子どもにとっては寂しく，辛い経験です．また患者本人のみならず，家族の経済的な負担は想像以上に大きいものがあります．ハウスは家族と入院中の子どもがお互いに心を通わせ，同じ境遇である他の家族と励まし合うことで困難を乗り越えられるように，また子どもが病院で治療を受けている間，安心して利用できる心のケアを含めた住環境を提供することを目的とし，患者自身だけでなく患者の家族をサポートする施設を目指しています．』

戦後日本経済は右肩上がりの高度成長をなし，国の財政も豊かで，医療福祉は公共費でなされるのが当然とされてきた．しかし世界経済変移への適応能の不足と少子高齢化とが相俟って，日本の行財政は危機的状況に陥った．弱者を救う医療福祉への財政支出は縮小せざるを得なくなった．これを補うのは，企業や個人からの寄付金であり，個々人のボランティア活動である．日本は寄付行為，慈善活動への積極的参加が要請される社会へと変貌しつつあるのだ．

国立成育医療センターも多くのボランティアの助けによって，日常の医療を行おうとしている．この2つの施設の運営が順調に行くことは，21世紀の日本の生き方への道標となるであろう．

Presented by Medical*Online